交互ぐるぐる描き物語統合法（MSSM法）における誘発線の機能について

――青年期後期を対象とした一考察――

藤　内　三　加*

Function of trigger line on Mutual Scribble Story Making（MSSM）

—an study for late adolescence—

Mika Tounai

要　旨

本研究の目的は、MSSM法の臨床的治療効果の指標をつくるための基礎的研究である。まずは、①スクリプルからMSSM法までの描画法の変遷を記述し、②セラピストが描く誘発線とクライエントが投影するモチーフとの関連性、特にセラピストが尖った描線を描き、クライエントが描線にモチーフを投影するまでの時間が長いことはクライエントへどのような心理的な影響力を及ぼしているのかを検討することである。

21歳から29歳の青年期後期にあたる大学生と大学院生18名（男性９名、女性９名）を対象にMSSM法を半構造化面接法で実施した。得られた資料を基に、尖った描線に絵を投影した反応時間の平均値とぐるぐるした描線に絵を投影した反応時間の平均値をT検定を用いて比較した。結果は、２つの反応時間の間には有意差が認められた。このことから、尖った描線をみると、調査対象者になんらかの影響を及ぼし描線に絵を投影するまでの反応時間が遅くなることが言える。また、MSSM法実施後のインタビューにおいて、「尖った描線をみると、窮屈さや緊張感を感じる」と述べた調査対象者が66.7％と多くみられた。さらに、「尖った描線への反応時間が長いこと」と「窮屈さ」や「緊張感」との関連性についても考察した。

はじめに

交互ぐるぐる描き物語統合法（Mutual Scrible Story Making：以下MSSM法と記す）とは、セラピストとクライエントが交互にスクィグルをし、そこに投影された様々な絵をクライエントが統合し、最終的に物語として語ってもらう芸術療法の一技法である。

今日、MSSM法に関する研究は、事例研究が多く、治療促進的な効果が報告されているが、統計的手法を用いた調査研究は未だ少ない。また、臨床場面でMSSM法が実施される場合でも、単にマニュアル（手続き）どおりに理解して導入しているように思われるケースも少なくない。

平成19年９月28日受理　*社会学研究科

セラピストの役割は、MSSM法を用いてクライエントを査定するだけではない。MSSM法を用いる中で、クライエントが何かを感じとり洞察を深めるように働きかけて、最終的にはクライエントが元気になるように心理的援助することである。具体的にいうと、セラピストがやみくもに誘発線や誘発線からの投影をするのではなく、クライエントの描画表現が円滑に促進しやすくなるように、セラピストが投影したいくつかの思いつきを選択して描いたり、誘発線を描いたりすることが臨床的に洗練された技法の用い方であると思う。

本研究の目的は、以下の２点である。

①スクリブルからMSSM法までの描画法の変遷を記述する。

②セラピストが描く誘発線とクライエントが投影するモチーフとの関連性、特にセラピストが尖った描線を描き、クライエントが描線にモチーフを投影するまでの時間とクライエントへの心理的なの影響力を統計的に検証し、いくつかの考察を加える。

対象者は、青年期後期の男女を対象とする。対象者を青年期後期とした理由は、次の通りである。Erikson（1959）、Blos（1967）は、青年期での「他者から分離し、独立した自己の確立（自我同一性・第２の分離/個体化」であると述べている。また、無藤（1995）は「自律的存在としての自己の維持、周囲との関わり合いを通じての自己の承認」をこの時期で確立させることが重要であると述べている。青年期という段階は、児童期から成人期への移行期であるとされるが、身体的成熟に伴い、精神的に自立して自己形成を行う時期でもある。外的現実としては、職業や社会的役割が選択される時期であり、内的現実ではさまざまな対人関係を通して自己の在り方について考える時期である。MSSM法の用法は、対人関係、特に２者関係の相互性から生じる青年期後期の自己イメージをみるのに非常に適しているので、青年期後期に属する者を対象として研究を行った。

Ⅰ．スクリブルからMSSM法までの描画法の変遷

まずは、スクリブルからMSSMにいたるまでの技法の変遷を（山中1992b）を参考にして、簡単に記しておくことにしよう。

(1) スクリブル（Scribble法）

スクリブル（Scribble法）は、米国の女流精神分析家ナウンバーグ（Naumberg, 1969）が開発した方法である。彼女は非言語的な表現の重要性を深く認識した精神分析家である。描画法に対する基本的姿勢は、「治療者は解釈を控え・・絵画が患者にとってどういう意味を持つのかを患者自身が見出すようにと励ますにとどめる」というものである。そして、力動指向的芸術療法という独自の芸術療法的アプローチを確立した。彼女は「患者が自発的絵画表現を解放しやすくする」ためにスクリブル法[1]を導入した。

ナウンバーグのスクリブルの実際の方法としては、

①リラックスした状態で、大きめの紙に流れるような一続きの線を即効的に描かせる。

②何度も交差した、もつれた糸のような形の中に、人物や動物や風景など何か見えてくるものを

探させる。

③紙の方向をいろいろと変えてあらゆる角度から眺め、見つけていくのである[2)]。

これは自由連想を、（言語的にではなく）イメージ的に促すものと位置づけることもできる。

(2) スクイグル（Squiggle法）

スクイグル（Squiggle法）は英国の小児科医にして精神分析家であるウィニコット（Winnicott 1971）の開発した方法である。ウィニコットの方法は、何枚のもの画用紙を用意して、治療者と患者とが交互にグルグル描きを出し合い、交互に「見つけ遊び」を行って、それを何往復も繰り返す。

中井や山中はこれが交互法であることから、ナウンバーグのスクイグル法と区別している。なお、石川ら（1993）は、スクイグルはsquirm（のたくる：くねくねとうごく）とwiggle（ぴくぴく動く）からなる言葉で、その語感からはmark（絵へと完成させられることになる不定形の描線）の意味で用いるのが相応しいと述べ、、ウィニッコットの方法はスクイグルゲームと呼ぶ方が誤解が少ないと指摘している。ちなみに新英和中辞典（2003）でみると、「Sribble」は、①走り書き、乱筆　②走り描きしたもの、落書き：雑文であり、「squiggle」は①短い不規則な曲線、くねった線　②なぐり描きであった。

(3)「相互限界吟味法を加味したスクィッグル法（Squiggle Technique〈Winnicott〉withMutual Limit Testing）

これらの２つの方法（Scribble法、Squiggle法）を日本に紹介した中井久夫（1982）は「限界吟味法を加味したスクィッグル法（Squiggle Technique〈Winnicott〉with Mutual Limit Testing）と呼ばれる方法を創出した。

この「限界吟味」は「ロールシャッハテストの限界吟味」と同じことをする。治療者が患者のグルグル描きに投影した内容が相手にどう受け取られているかが気になり、「患者に聴いてみればよい」と思い立ったのがきっかけだという。

相互限界吟味法を加味したスクイッグル法の実際の実施法としては、

①導入的な会話の後、治療者と患者は横にある机と方向を向いて座る。

②治療者は画用紙を置き、初回はルールを説明する。（予備的に一部を実演してみせてもよい）

③治療者が画用紙に枠どりをし、サーブ（描線を描く）の順番を決め、サーバー（描線を描く者）がなぐり描きをレシーバー（描線に絵を投影する者）に手渡す。

④レシーバーがサーバーにたずねながら投影してゆき、結果を枠外に書き込み、記号づけをする（サーバーがレシーバーの投影したものがみえたかどうか○と×をつける）。

⑤サーバーが認知したものの中からサーバーに一つ選んでもらう。

⑥レシーバーが色彩完成をして、これでいいかサーバーに示し、サーバーが返答する。

中井は投影のコツとして画用紙の紙面の一つの方向ごとに、「大きなもの」「ちいさなもの」「堅いもの」「柔らかいもの」の４通り、さらにそれを４方向からみれば、理論的には一つのグル

グル描きに対して16個の投影が得られるが、患者に怪訝な顔をされないのは５～６個、実際には７,８個がせいぜいである、と述べている。

(4) 交互ぐるぐる描き物語統合法（MSSM法）

山中（1984）は、これらを踏まえた上で、Scribleを３－４往復して彩色し、それらのアイテムを使って物語を作ってもらっていたが、（一回の面接だけでも数枚以上の画用紙がやり取りされるので）整理の段階で投影の順序が混乱したり、用紙が紛失するなどのことがあり、煩雑さを解消するために、B4一枚の用紙にまとめることにしたという（山中、2003）。これを山中は、MSSM（Mutual Scrible Story Making）法、交互ぐるぐる描き物語統合法、と呼んだ。具体的な実施法については、この後の「Ⅱ．MSSMの実施法」をみていただきたい。

この方法の治療的な点は「無意識が投影したものを、物語を作ることによって再び意識の意図でつなぎとめる」点にある。

山中はさらにこれを、コラージュを加味したMSSM＋Cに発展させた。この技法では、さらに遊びの要素と美的な要素が加わることにより一味異なる治療的色合いが醸し出される。そして岸本（2005）は、勤務している心療内科の外来の中で１枚でやるよりも、２枚法の方がスムーズに導入できるのではと感じたという。また、１枚法を行うと、テストとして受け取られる可能性があるが、２枚でやれば対等に紙面に向き合えるなど、いくらかの治療的にいかせるのではないかという予感を得て、２枚の紙を交互にやり取りする方法を臨床に取り入れ、これをd－MSSMと命名した。両技法（MSSM＋C法、d－MSSM）とも山中のMSSM法の発展する技法となった。もっと両技法について詳細を述べたいところではあるが、本研究では、スクリブルからMSSM法までの技法の変遷を辿るということをはじめに述べているので、ここでは割愛する。（Figure 1参照）

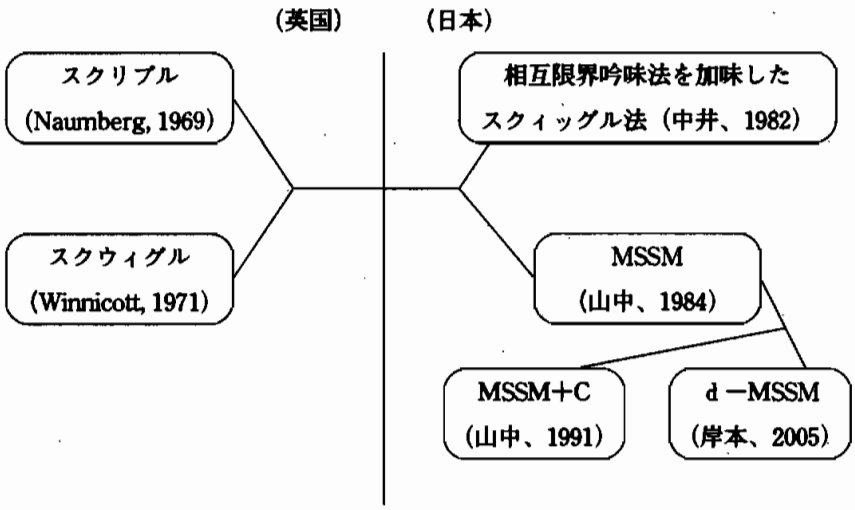

Figure 1　スクリブルからMSSM法（MSSM＋C、d－MSSM）までの描画法の変遷

Ⅱ．MSSMの実施法について

MSSM法の具体的な実施法については、数多くの表現療法関連の著書や「心理臨床大辞典」（培風館）にもとりあげられている。ここでは、（山中、1984, 1992, 2003）の方法を以下に述べておく。

あらかじめ用意しておくものは、8つ切り程度の画用紙、黒のサインペン、12～24色彩度のクレヨンである。

①セラピストがクライエントの前で、画用紙にサインペンで額縁のような枠どりをする。

②クライエントにサインペンを渡し、「さあ、マンガのコマどりのように、6コマから8コマくらいに、コマどりの線を入れてよ」と教示する。

③じゃんけんをして、勝った方が、任意の1コマに適当にぐるぐる描きをする。クライエントが勝った場合には、たとえば「ぐるぐるっと好きな様に線を描いてみてよ」などとと促せばよい。

④負けた方は、そのぐるぐる描きの線の中に何かの形を見つけ、クレヨンで色彩し、何かを見つけたかを言う。クライエントが負けた方であるならば、「さて、ここに何か見えてこないかな」と訊く。通常、セラピストがクライエントの見つけたものを文字でそのコマの中に記す。

⑤2コマ目は、ぐるぐる描きの役割を交代しながら埋める。ただし、最後のコマは空白として残す。

⑥クライエントに「ここに描かれたもの全部を使って、お話を作ってください」と言う。コマの順番にはこだわらなくてよい。その物語をセラピストが空白のコマに書き込む。（Figure 2参照）

Figure 2. MSSM法の描画（参考図）

Ⅲ．方法

(1) 対象

対象者は青年期後期にあたるA大学に在籍する大学生及び大学院生計18名であった。年齢は21歳から29歳、平均年齢23.0歳、標準偏差は19.10であった。性別の内訳は男性9名、女性9名であった。描画研究にあたっての被検者の募集に際し、研究の主旨を理解して自発的に協力してくれる者を募った。

(2) 手続き

すべての調査対象者に対して筆者が個別にMSSM法を実施した。実施法は、各調査対象者は週１回の割合で、合計４回行った。よって実施期間は一ヶ月である。すべての調査対象者にMSSM法実施に要した期間は10ヶ月であった。実施時間は一回につきMSSM法実施時間は40分、MSSM法に対してのインタビュー実施時間は20分であった。実施した場所は大学内の静かな教室の一室で行った。筆者のMSSM法に関する経験は、約５年である。

MSSM法の実施方法としては、

①筆者が、Ａ４サイズの画用紙に黒のサインペンで額縁のような枠取りをし、調査対象者に「今私が枠取りをした線の中に、マンガのコマのようなコマ取りの線を６つ作ってくださいね。どのような形になっても構いませんので、思いついたまま描いてみてくださいね。」と教示をして、画用紙と黒のサインペンを手渡す。（山中、1984, 1992, 2003）の実施法では、８つ切り画用紙であるが、今回Ａ４サイズの用紙を使用したのは、実施時間（40分）の都合で、画用紙のサイズを小さくした。

②調査対象者がコマ取りをした後、「これから、線を描く役割と、線を見て、見えたものを絵にする役割を交互にやっていくのですが、（調査対象者の名前）さんはどちらの役割を先にやってみたいですか？」と調査対象者の希望を聞き、調査対象者が線を描く（あるいは絵を描く）と言えばそれに従って行う。特になければ、筆者が線を描いた。

③筆者が先に線を描いた場合は、調査対象者が筆者の描いた線から見えたものを絵にしないといけない。そこで、「今、私が描いた線からなにか見えますか？見えたものをクレパスで絵にして見てくださいね。」と筆者が調査対象者に教示し、クレパスを渡す。調査対象者は見えたものを絵にして、それが何なのか話し合った後、サインペンでコマの中に絵の名称を記す。

調査対象者が先に線を描いた場合は、「さて、何が見えるかなぁ…」などとつぶやきながら、筆者が線からみえたものを絵にする。絵は、みえたものを描くのではなく、いくつかみえたものを頭の中で上げて、調査対象者が線から絵を投影しやすいであろうものをひとつ選んで絵を描くようにした。

④２コマ目は、ぐるぐる描きの役割を交代しながら埋める。ただし、最後のコマは空白として残す。

⑤調査対象者に「今からここに描かれたものすべてを使って、お話を作って下さい。コマの順番どおりに物語にしなくても結構ですので、自由にお話を作って下さい。思い浮かんだら、最後の空白のところに物語を書いて下さいね。」と教示する。そして、黒のボールペンを調査対象者に手渡す。その物語をセラピストが空白のコマに書き込む。

MSSM法を実施した後、以下のことについて調査対象者に半構造面接的なインタビューを行った。

①書かれた物語についての口述的な説明をさせた。

②描かれた５の絵について、調査対象者が気に入っているものと気に入らないものを１つずつ選ばせた。

③　②についての口述的な説明をさせた。
④筆者が描いた尖った描線についての感想。
⑤全体的な感想。

その後、調査対象者にA4の用紙に自由形式で感想を記述させた。

Ⅳ．結果

(1)「尖った描線」と「ぐるぐるした描線」の反応時間の比較

「尖った描線」を筆者が描いてから、調査対象者が描線を見て絵を投影するまでの反応時間を計り、「尖った描線」の反応時間の平均値と「ぐるぐるした描線」の反応時間の平均値をTable 1に示した。「ぐるぐるした描線」よりも「尖った描線」への反応時間の方が1.51～9.74倍であった。

次に、MSSM法の後に行った調査研究者へのインタビューでの「筆者が描いた尖った描線についての感想」を分類し、頻出頻度を算出したものをTable 2に示した。「尖った描線を見たとき、なにをかけばいいのかわからなくなり緊張した」と記述した者が8人（44.5%）、「曲線だとイメージしやすいが、尖った線はあまり想像できず手こずった」と記述した者が6人（33.3%）、「尖った線はきゅうくつに感じる」と記述した者が4人（22.2%）であった。感想の記述で一番多いものは、「尖った描線を見たとき、なにをかけばいいのかわからなくなり緊張した」であった。尖った描線の方が、ぐるぐるした描線よりも絵をみつけやすいなどの感想を記述するものはいなかった。

また「尖った描線」と「ぐるぐるした描線」の反応時間に差があるかどうかをみるため、t検

Table 1　「尖った描線」と「ぐるぐるした描線」への反応時間の平均値

（単位：秒）

調査対象者	尖った描線	ぐるぐるした描線	調査対象者	尖った描線	ぐるぐるした描線
A	117.8	47.8	J	27.5	17.7
B	174.5	50.8	K	16.3	18.7
C	85.8	35.5	L	33.5	19.7
D	58.3	28.1	M	35.3	14.3
E	69.3	19.8	N	40.0	11.6
F	76.8	34.0	O	18.5	6.80
G	70.8	36.2	P	46.3	22.3
H	126.3	41.6	1	39.8	14.7
I	26.0	12.3	R	91.5	8.80

定を行った結果をTable 3 に示した。F=10.505　P<.05と有意差がみられ、2 つの反応時間に差があることがわかった（t=3.43　P<.05）。

Table 2　インタビューでの尖った描線を見たときの感想

（単位：人数、%）

内容	人数	%
尖った描線を見たとき、なにをかけばいいのかわからなくなり緊張した	8	44.5
曲線だとイメージしやすいが、尖った線はあまり想像できず手こずった	6	33.3
尖った線はきゅうくつに感じる	4	22.2

Table 3　「尖った描線」と「ぐるぐるした描線」の反応時間（平均値）のT検定

	尖った描線	ぐるぐるした描線	P値
反応時間（平均値）	62.0	25.1	P<.05

V．考察

(1) 尖った描線とぐるぐるした描線の比較

本結果から「尖がった描線」の反応時間は「ぐるぐる描線」の反応時間よりも反応時間が有意に差があった（t=3.43　P<.05）。MSSM法の後に行った調査対象者へのインタビューでの「筆者が描いた尖がった描線についての感想」では、「尖った描線を見たとき、なにをかけばいいのかわからなくなり緊張した」と 8 人（44.5%）が記述しており一番多かった。本結果から、尖った描線をみて絵を投影するまでの「反応時間が長い」ことと「緊張感」「窮屈さ」を感じることとは何らかの関係があることが示唆される。

また、インタビューの中で、「緊張感」「窮屈さ」を感じた調査対象者に対してさらに内省をうながすと、「今まで筆者の描線はぐるぐるした描線だったのに、急にそうでない線を描かれたのでどうしてなのかと思い焦った。」や「線が難しく感じて、意味のない線から絵をみつけだすことを筆者と競っている感じがした。」などの返答があった。このことから、描線の中にもメッセージ性があり、それを調査対象者は感じ取って絵を投影していることがわかる。このことは村瀬(1993) も同様のことを述べている。

本結果に示されたように、MSSM法を心理カウンセリングで導入する際、セラピストが描線から絵を投影する時に時間がかかっていることに気づき、そのことをMSSM法の後に、クライエントとフィードバックすることは臨床的意義があると思う。クライエントがセラピストの描い

た描線をみて感じていることを話合うことは、セラピストとクライエントとの関係性の理解に繋がる。中井（1982）は、「スクイッグル法は、治療関係をあぶり出す、もっとも鋭敏なリトマス試験紙である。治療者側の感情がほとんどむき出しに近い形で表現されうる。」と述べている。また村瀬（1993）も「治療者自身の状態を知り得る、治療関係の質を知り得る。」と述べている。セラピストとクライエントの関係性を深く理解することは、転移―逆転移の理解にも繋がる。セラピーを重ねるにつれて、クライエントはセラピストに父親や母親のこと、あるいは理想の男性像（アニムス）、女性像（アニマ）を転移するようになり、さまざまな情緒を感じるようになる。

描線から絵を投影することは、対人関係のやりとりをすること（対人からの言動に対し、どのように返していくか）にも類似しているように思うので、描線から感じたことを話し合うことはセラピストとクライエントの間でくり広げられている転移―逆転移を知る手がかりになる。

MSSM法には、誘発線や絵を投影するまでの時間などの細部に渡って、取り上げ話し合う情報がたくさんあった。本研究では、描線からの反応時間と心理的影響との関連性をみた。しかし、反応時間が長いことが、緊張感を感じている傾向にあるというところまでで、まだ立証されていない。今後、調査対象者を増やし、反応時間が長くなることの原因を細かくみていく必要がある。また、その他の細部（モチーフ、物語、会話など）をみていくことが今後の研究課題である。

注

1）中井は「なぐり描き法」と訳して本邦に紹介したが、山中は「なぐる」という語感が治療場面にそぐわないとの観点から「グルグル描き法」と訳している。

2）山中（1990、1992a、b、2003）はこの点に注目して、「見つけ遊び」とも呼んでいる。

謝辞

本論文の執筆にあたり、ご指導をいただきました奈良大学教授の前田泰宏先生、西脇二一先生、貴重なご助言をいただきました京都文教大学教授の濱野清志先生、兵庫教育大学大学院講師の工藤昌孝先生、本研究テーマを研究するきっかけをくださいました臨床心理士の高津由希先生、また、お忙しい中、調査にご協力くださいました奈良大学大学院生、大学生の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

山中康裕（1990）絵画療法とイメージーMSSM「交互なぐりがき物語統合法」の紹介をかねて現代のエスプリ, 275,93-103.　至文堂

山中康裕（1993）私のスクイグルーMSSM＋Cへの招待ー臨床描画研究13, 51-69.　金剛出版

山中康裕編（2003）表現療法　49-66.　ナカニシヤ

山中康裕（2003）「MSSM＋C法」の誕生まで　臨床心理学 3, 5, 627-630.　金剛出版

山中康裕（2007）絵画療法の本質　臨床心理学 7, 2, 58-164.　金剛出版

中井久夫（1985）中井久雄著作集 2 巻精神医学の経験　治療　192-202, 232-245.　岩崎学術出版

中井久夫（1984）中井久雄著作集 1 巻精神医学の経験　分裂病　岩崎学術出版

石川元、玉井康之、森治樹（1993）「スクイグル」とは何か－Winnicottから派生したZiegler, Simon, Claman に探る－　臨床描画研究13, 3-18.　金剛出版

村瀬嘉代子（1993）スクイグルの治療促進的内面過程　臨床描画研究13, 35-50.　金剛出版

村瀬嘉代子（2003）統合的アプローチー個別的にして多面的アプローチー臨床心理学 3, 5, 659-665.　金剛出版

松本真理子（1997）スクイグルの治療的意義に関する一考察　言語発達の視点を中心に　心理臨床学研究15, 5, 501-512.　誠信書房

中植満美子（2004）子どもの描画と攻撃情動の継続的変化に関する研究　心理臨床学研究22, 4, 385－393.

中植満美子（2007）スクイグル法による子どもの描画表現に見られる発達的特徴とその変化に関する研究　心理臨床学研究25, 1, 37-48.

藤生朋子（2003）スクリッブルとスクウィッグル　現代のエスプリ別冊188-202.　至文堂